
嘘つきガール

星 成太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきガール

【Nコード】

N15430

【作者名】

星 成太

【あらすじ】

この春、僕は高校二年生になった。特にパツとしたところもない僕。そんな僕のいるクラスに転校してきたのはすごい元気な美少女だった。

すぐに学校中の話題になる彼女。僕はある出来事で彼女と友達に。そして彼女は僕に嘘をつく。

ブログ遅刻!? (前書き)

初作品です！

アドバイスやご感想があればぜひ！

プロローグ／遅刻！？

僕の名前は赤城 恵介（あかぎけいすけ）。

身長は176cm、体型は細い。髪の色は黒。瞳の色は茶色。

この春から成豊学園の2年生になった。

成豊学園は進学校で、僕の家からは歩いて通える距離にある。

校風はとにかく自由。制服こそあるけど、校則はそこまで厳しい訳ではない。

先生方も生徒たちも様々な個性を持った人たちがいるんだ。

で、僕がこの高校に進学しようと思ったのにはいくつか理由がある。1つはやはり校風だね。中学の時から成豊学園の独特な校風は評判になっていて、僕も興味を持ったんだ。規則だらけなのが学校と思っていたので自由と言われたらやはり気になるものだろう？

この校風の元での学校生活がどんなものであるかはおいおい分かるとして、今言えるのはやっぱり自由だな。ということかな？

2つ目は進学。特に進路を決めているわけではないのだけど、一応大学くらいは行っておけば無難かな？と思って進学校である成豊学園に進学を決めた。

倍率も校風のせいかなそれなりに高かったけど、何とか合格することができた。

親にも大学くらいは行けって言われていたし、この学校に進学できてよかったと思う。

僕の両親は父がカメラマン、母が元モデルで今はデザイナー。母さんのモデル時代に父さんが写真を取るようになったのが2人の出会いらしい。

2人は「運命の出会いだった！！」と声をそろえて言っていた。

父さんも母さんもここ数年は世界中を飛び回って仕事をしている。そんな両親なので二人とも家にはほとんどいない。スカイプでたまに連絡を取るくらいかな。

昔は僕も一応実家に住んでいたんだけど、いつも一人で生活していたから、高校生になってからは本格的に一人暮らしをすることになった。

一人で生活することにはもう慣れていたし、家事などは自分でできる。

慣れてしまえば一人暮らしは特に難しいことではなかったけど、それでも一人だと辛いことがあった。

さっきこの春から高校2年生だと言ったけど、実は今日が始業式。2年目の高校生活最初の日だ。

うちの学校はクラス替えがないからそんなにドキドキ感はないけど、やっぱり大事な日なんだよね・・・
落ち着いた気持ちで臨みたいよね。

そんな日の朝、家からの通学路を・・・

「はあ、はあ、はあ、くそくそ!!」

僕は走ってます。

一人暮らしの辛いこと、それは寝坊すること。
起こしてくれる人がいないから、寝坊することがたまにあった。

昨日の夜にゲームをしすぎてしまい、寝るのが遅くなったからなのかな？目が覚めたら、

「・・・・あああああ~~~~!!」

かなり寝坊していた。

今日に限って……。

僕は急いで学校へ行く準備をした。

朝ご飯はあきらめよう！

顔を洗い、歯を磨き、制服を着て身だしなみを整えた。

「よし！行ってきます！」

鞆をつかみ玄関を飛び出し、鍵を閉めて駆け出した。

そして今に至る。もう遅刻は確定しているのだけど、だからって歩いて行けるわけでもない。

無駄なあがきというやつ。

高校2年目最初の日、いきなり遅刻です。全力疾走です！！

プロローグその2（登校）

家を出て走ること十数分。バテバテになりながらも何とか学校に到着することができた。

校門の前で足を止めて肩で息をしながら校舎を見る。大きな校門が特徴的な成豊学園の校舎はどちらかと言うと洋風な作りになっている。最近校舎の建て替え工事があったのでどこもかしこも新しい。校門沿いには桜が咲いていて、春を感じさせてくれる。

校門の前で考えてみた。これからどうしよう？もう始業式始まつてるだろうしな……。途中から入るのも目立つから嫌だし。先生に怒られに行くようなもんだしな。

まず始業式をしているであろう体育館にそおくと入る。⇒でも先生に見つかる⇒怒られる⇒生徒にも見つかる⇒目立つって感じかな。やっぱり嫌だ。出来る限り目立ちたくない。

教室に行き始業式終りの皆が帰ってくるのを待つことにした。教室に向かうため校門をくぐる。皆始業式に出ているだろうから誰も校舎内にはいないと思う。玄関で靴を履き替えて廊下を歩く。僕のクラスはE組。全部でクラスはAからEなので、一番端っこの教室。2年生だから2階かな。1年生は1階で3年生は3階になっている。2階に行くために階段に足をかけた。

「あれ？赤城か？」

僕は背後から声をかけられて飛び上がった。恐る恐る後ろを振り返る。そこにはスーツを着た若い男性が立っていた。背が高く、細身の体系だ。始業式に出ていない生徒がいるのを不思議に思っているような顔をしている。

「お、大木先生・・・おはようございます」

突然の出来事に声が裏返ってしまった。

「おう。で、何してんだ？今始業式中だろ？」

「いや、それはあの、せ、先生こそどうしてこちらに？」

「俺か？いや、そのあれだ、寝坊だ」

男性は頭をかきながら言った。

この若い男性は成豊学園の数学教師で、僕の担任の大木先生。若いので生徒から慕われていてちよつと抜けたところもあるがいい先生だ。まさかこんな所で出くわすとは・・・。てか先生も寝坊したんですね。

「で、何してんだ？」

「僕も寝坊です」

「それでどこに行こうとしてるんだ？」

「教室でみんなを待とうかな」と

正直に答えることにした。嘘をついてもバレてしまう気がした。そもそも嘘をつくのが得意じゃないんだ。果たしてこの選択が吉と出るか凶と出るか。先生は何か考えている様子だ。怒られるパターンなのか？

「んー、よし」

先生は何か考え付いたような顔になった。やはり怒られてしまうのだろうか。先生は僕に指を指して言った。

「本当は始業式に遅刻してしかもそのまま出席しないで教室行こうとしたのはどうかと思うから説教してやろうかと思ったけど、お前に代わりにある役目をしてもらうのでチャラにしてやってもいいぞ」

え？怒られないの？まあ大木先生あんまり怒る人じゃないから説教は無いと思っただけ、まあ先生も寝坊で遅刻してるしそんなにキツくは言えないか。代わりになんかの役目を任せられたらチャラか。

「クラス委員とかですか？」

「いや、それじゃない。やりたかったらしてもいいけど」

「結構です」即答した。

「断るの速いな。まあどんな役目なのかは秘密だ。やるか？」

どうしようか？面倒なことではなければやってもいいけど。少し考えてから答えた。

「じゃあやらせてもらいます」

無難な答えで行くことにした。断ると後が怖いし。どうせ大したことじゃないでしょ。

引き受けると先生は笑顔で「そうか。じゃあよろしくな。俺は職員室行くから、教室で待ってろ」と言って行ってしまった。

なんなんだろう？

プロローグその3 教室にて

「お？ ケースケ来てるじゃん」

「ホントだ。初日から学校サボったのかと思った」

「それはいくらウチの高校でも自由すぎるだろ」

教室で皆が始業式から帰るって来るのをウォークマンで音楽を聴きながら待っていると、ようやく終わったよう教室の入り口から僕が教室に居るのを見つけた3人の男子がこちらにやって来た。1人は身長が高くおしゃれなメガネをかけていて、1人は僕と同じくらいの身長でパーマのかかった髪をしていて残りの1人は背がそれほど高くなく、中性的でアイドルのような顔立ちだ。3人は始業式に出なかった僕をからかいながらこちらにやってきた。

「寝坊したんだよ。途中から入るのも嫌だったし」

「そこは勇気持って入ってこいよ、俺たちが大きな声で先生たちに教えてやったのに」

「行かなくてよかった」

「どうせゲームしてたんだろ？ 俺もだけどな」

春休み中にプレイしたゲームの進み具合を語りながらおしゃれメガネの嶋本、パーマ頭の岡崎、アイドル顔の水野が僕の周りの席に座った。大体学期初めの席は自由に決めていることになっていたのだ、窓側に座った僕の周りに座った彼らの席は決定したと言っているだろう。皆僕と同じようにゲーム三昧の春休みを過ごしたらしい。この3人は僕の親友で、中学こそ違うものの、同じクラスになっからは大体僕を含めたこの4人で一緒に居る。

「だからって初日から遅刻すんなよな」

岡崎が自分のリュックを机にかけながら言った。

「してしまったのはしょうがないじゃないか」

「ゲーム禁止だな」

窓から見える桜を眺めながら嶋本が呟く。お前こそ春休みにはバスケ部の練習があったのにゲームばかりでいいのか？

「お前らゲームばかりかよ。暇人だな」

水野は椅子にふんぞり返って言った。水野以外の3人はいきなり偉そうな態度になった水野に視線を向けた。

「なんだよ随分偉そうじゃん。なんかあったのかよ」

嶋本が食いついた。岡崎も同じような事を言っている。それだけのことを言うんだから水野はゲームしてたわけではないんだろうな。僕は様子を見ることにして聞き手にまわった。

2人の反応を見て水野は立ち上がり僕らを見下ろしながら言った。

「楽器を始めたんだ！ベースをね！」

「……」

得意げに言った水野をよそに僕、嶋本、岡崎は沈黙に包まれた。

岡崎が口を開く。

「……やっとか」

「ああ！猛練習中さ！」

「そうか」

水野以外は皆すでに楽器を弾くことができてるんだけど。僕と岡崎がギターを、嶋本がドラムをそれぞれ上手いとはいえるほどではないがすでに弾けるようになっていて、水野だけが何も楽器をしていなかった。高校で同じクラスになって水野に楽器を進めたんだけど、その時に水野は練習が面倒だと言って始めようとしなかったん

だ。だから皆いまさらかよって思っているんだと思う。嶋本と岡崎は苦笑いをしていた。皆には水野がベースを始めた理由が見当が付いていた。僕は水野に聞いてみた。

「なんで今になって楽器を？」

「だってモテたいだろ？」

3人ともため息をついた。水野は女の子が大好きなんだ。予想通りだった。水野はモテたいという一心でいろいろするのだけど、その意気込みの強さが裏目に出てあまり効果は上がっていなかった。水野はどちらかというとかわいいという感じだから、モテるといふよりは可愛がられているという感じだった。本人はそれでもそれなりに満足しているみたいだけどね。

皆2年になっても変わんないな・・・

僕は窓から校門の方を見ながら思った。

すると校門のところに女の子が1人歩いていた。成豊学園の制服を着ているけど見たこともない顔だから2年生ではないのかな。僕と一緒に遅刻だったりしてね。

「遅刻して歩くななんて度胸あるなあ」

小さくつぶやいた。

「ケースケ聞いてんのか？」

「えっ？ ああ、ごめんごめん」

ベースを熱く語る水野に怒られてしまった。すぐに水野の方に向きなおす。

その時は彼女のことをどうでもいいことだとすぐに忘れてしまった。その時が僕らの始まりだったというのに。

ホームルームでご降臨（前書き）

アドバイスお待ちしております。

ホームルームでご降臨

その後大木先生が教室に入ってくるまで水野のにわかベース談義は続いた。どここのバンドのベースがいいだとか、この曲のこのベースパートがいいだのという話を聞かされていた僕らにとって、稀にある先生が早く教室に来てくれてよかったと思える時でした。

「おーし、ホームルーム始めるぞ。席に着け」

そう言って大木先生は教室に入り教卓の前に着いた。教室を見渡した大木先生と目が合ったんだけど、先生はニヤツと顔に笑みを浮かべた。僕は体をビクツと震わせた。なんだ？なんで笑ってんの？さっきのやつ？さっきの遅刻見逃がす代わりの役目ってやつ？僕は心当たりがあるだけに不安でたまらなくなった。先生は授業中にも目が合うとこんな感じにニヤケてから問題を解けと指名してくるの。何か企んでいるのはわかっていた。

先生はその後顔を元に戻し喋り始めた。

「今日から2年生だな。進級おめでとう。例によって適当に席就いてるみたいだから、後でクラス委員決めたらそいつ中心で座席表作って提出してくれ」

大木先生は紙を手にとってペラペラと振りながら言った。

「まさか始業式からいきなり遅刻する奴なんかないと思ってたら誰かさんは遅刻したし、今年も面白くなりそうだな」

うっ。僕のことですか。先生だって遅刻したくせに。隣に座っていた岡崎がこちらをチラッと見て笑った。

その後も先生は春休みの課題はそれぞれの教科の最初の授業で出せとか、これからの日程などを長々と話していった。

皆は先生の長い話に嫌気がさしているようだった。寝ている人もい

た。

「さて、連絡事項はこんなところかな・・・っとしまった、皆にもう一つ大事なお知らせがあった」

お、やっと話終わり？と思ったら大事なお知らせ？こんだけ長く話しておいてまだ話があるって？クラス中が嫌気と好奇心の混ざった顔をしている。これでどうでもいいことだったら暴動ものかな。クラスの反応をみて大木先生は苦笑いをした。

「えっと、今年からこのクラスに転校生がきます。」

「・・・ええええええ！！」

クラス中がどよめいて一気に皆が喋り始めた。水野なんかは「絶対女子だ」などと予言を始めている。なんでわかる？

そのほかにもクラスメイトがそれぞれの予想した転校生像を話していた。男子だ女子だから、カッコいい、可愛いという話まで。外国人だろうなんて普通あり得ないことを言いだすやつまでいた。というか先生、まさか今まで教室の外に転校生待たせてたんじゃあないだろうね？

「いやゝすっかり外で待っててもらったのを忘れてた」

おい。どこまでベタベタなんだ。普通覚えてるでしょ。

「じゃあ入ってもらうか。穂村、入ってくれ」先生は少し声を大きくして教室の外に居る転校生、穂村さん（くん？）を呼んだ。

その後教室の扉が開き、転校生が入ってきた。クラス中の視線が教室に集まる。果たして外国人なのか？

それとも宇宙人か？・・・ふざけすぎかな。

「ううゝ寒い。先生話長すぎですよ。あと私のこと忘れないでくださいよ」

「いやゝ悪い悪い」

クラス全員が教室に入ってきた転校生をみて目を見開いた。

教室に入ってきたのはかなりの美少女で、僕が、さっき教室の窓越しに校門を歩いているのを見つけた女の子だった。転校生だから顔を見たことがなかったのか。水野が「やっぱり女の子だ、しかも美少女!」とはしゃいでいる。

転校生の穂村さんは教室の外が寒かったのだろう、肩をさすりながら黒板の前に立った。

「初めまして。穂村 奏（ほむらかなえ）です。よろしく!」

大役に任命？

男子も女子もクラス中の全員の眼が美少女転校生、穂村さんに釘づけになった。小さな顔に眼力のある目、形の整った鼻、黒い綺麗なロングの紙には天使の輪が浮かんでいる。綺麗とも可愛らしいともとれる彼女の顔は柔らかい微笑みを浮かべていてそれはまさに美少女だった。その笑顔に何人かの男子はノックアウト寸前になっている。

「穂村はついこの前まで大森の方に住んでいたんだが、穂村の家庭の都合によってこちらに引っ越してくる事になり、この成豊学園に通う事になった」

大森か、これまた随分遠くから引っ越してきたんだな。大森はこの成豊学園のある津葉からはかなり遠い。

「あ、でも私は小さい頃はこの辺に住んでいたんですよ？」

「おお」

クラスの中から声が上がった。なにがおおなんだ？

それを聞いて隣の岡崎が話しかけてきた。

「ケースも昔はここらへんに住んでいたんだろ？あいつに会ったこととかあんの？」

「んー昔のことはあんまりよく覚えていないからなく多分名前も聞いたことない」

「そうか。しかし美人だな」

「ああ」

実は僕も小さい頃はこの辺りに住んでいた。今の実家は離れたところにあるのだが、その実家はその前にこの辺りにあった家から引っ越していたのだ。両親の都合で引っ越し、一人暮らしをしながら成

豊高校に通う為にまた戻ってきた。それを僕から聞いていた岡崎はあれほど可愛い女の子が近所に居たんなら知っていると思ったんだろうけど、僕には心当たりは無かった。

その後も騒がしかった教室を大木先生が静かにさせた。

「はい静かに。今日からこのクラスの一員として穂村には学園生活を送ってもらうんだが、実は穂村はいさつで春休みに職員室や校長室に來ただけでこの学園の中とか全然知らないんだよな」

「はい先生、私何もわかりません！」

「そこでだ。穂村に一人学園の案内係をつけようと思うんだ」

「わぁ！本当ですか？うれしいです！さすが大木先生カッコいい！」

・・・穂村さん、大木先生と打ち合わせしたでしょ。演技がわざとらしくすぎるよ。

しかし我がクラスのバカ男子ども（言い過ぎ）はそんな白々しい演技になど気付いていなかった。案内係の話が出た瞬間からクラスの雰囲気が変わっていた。

「おい。穂村さんの案内係だつてよ」

「つまり好感度アップだよな？」

「俺やりたいな」

「なに？じゃあ俺がやるよ！」

「いや俺が！」

「俺だ！」

クラスの男子のテンションが急上昇していた。男子がこぞって穂村さんの案内係に立候補していた。

そしてそれを女子が冷ややかな目で睨んでいる。穂村さんも笑顔が若干ひきつってきていた。さらにどの男子よりもテンションが上がっていたのが

「黙れ男子！僕がやるに決まってるだろ！」

水野だった。いくら女の子大好きだからってでかい声で何言ってるだろうこの人は。そういうところが逆効果だって言ってるんだよ。そしてこの騒ぎを大木先生が再び静めた。

「うるさい！お前らよく本人の前で堂々と・・・若いなあ」

「みんな元気ですね」

「これがこいつらの唯一の取り柄なんだ」

ひどい言いようですね先生。僕も一緒にしないでほしい。大木先生は話を続けた。

「残念だったなお前ら。穂村の案内係はもう決めてある」

「はあ？」

「ふざけるな」

男子からのブーイングの嵐。

「うるさい！その案内係と言うのは・・・」

案内係なんかごめんだ。こいつらに血祭りに挙げられてしまう。このクラスから消されてしまうだろう。そもそも穂村さんと一緒に学校を歩いてみる、かなり目立つに決まっている。

絶対に僕でありませんように・・・。

しかし願いは儚く打ち砕かれた。

「・・・赤城、お前だ」

「はああ!？」

男子VS僕

穂村さんの学園案内役として僕を指名した大木先生はさっきのように顔に笑みを浮かべていた。そして僕は理解した、これが先生の言った『代わりの役目』なんだと。さっきの先生の何か企んでいるような顔はこれだったんだ。冗談じゃないぞ、こんなの分が悪すぎるじゃないか。たかが遅刻1回と、こんな男子からの集中砲火を受ける危険度Aの役目とじゃ釣り合わない。

先生に向けていた視線をクラスの皆の方へ向けてみると

「赤城が？」

「穂村さんの？」

「案内役だと？」

「血祭りじゃ」

「そうだ、あいつを消せばチャンスはまだ・・・」

男子が僕を殺意のこもった眼で睨んできていた。まずい、奴ら僕を消す気だ。どうしよう、まだ死にたくないよ、もっと生きたいよ！

「先生、赤城君っていうのは・・・」

「あそこに座ってるパツとしない奴だ。赤城恵介。ほら、男子が穂村の案内役になった赤城を今にも殺してしまいそうに睨んでいるだろう？」

パツとしないって言わないでください。先生、僕が殺されそうなのはあなたのせいですよ？なんで僕なんですか？悪いことしましたか？

穂村さんと目が合った。

すると穂村さんは僕を見て何故か顔を強張らせた。さっきまでの笑

顔とは逆で、驚いた顔って感じかな？

その後すぐに彼女は表情を戻して僕に会釈をしてきた。僕も会釈を返す。

僕、何かしたかな？その時は特に気にならなかった。いや、気にすることができなかった。

大木先生がクラスメイトの、僕に対する殺人衝動にさらに拍車をかけることを言ったんだ。

「で、穂村の席は、よし岡崎そこ退け。穂村には赤城の隣に座ってもらうことにする。案内係だし」

「え？じゃあ俺の席は？」

「あ？お前一番後ろの空いた席」

「え〜！」

なんですって！？僕の隣にいた岡崎が一番後ろに左遷で穂村さんが僕の隣？マズイマズイ！これじゃあ僕は完全に男子の恨みレベルが上がってしまうじゃないか！予想通り僕は男子からの殺意がより禍々しくなっているのを感じた。

これは何としても阻止しなければ、本当に消されてしまう！

「先生！それではいくらなんでも岡崎がかわいそうです！彼は今日この席に座るのをとても楽しみに春休みを過ごしていたんですよ？

（もちろん嘘）」

「いや、俺そこまでじゃ・・・」

「そもそも穂村さんが僕なんかの隣だなんて皆が納得しませんよ！」

「そうだそうだ〜！」

「みんなに平等なチャンスを！」

僕は必死に抵抗した。何としても避けたいんだ。生きたいんだ！！

穂村さん、僕がこのまま消されてしまったら君を恨むからね！絶対そんなことは嫌だけでも！

しかし僕の抵抗は穂村さんによって蹴散らされた。

黒板の前に立つ穂村さんが微笑みながら口を開いた。

「でも案内してくれる赤城君が隣だとありがたいんだけど、ダメかな？」

この一言にさっきまで散々言ってたバカ男子たち

「いいです！」

手のひら返しやがった。所詮バカ男子だった。しかもこの一言で男子の殺気が消えていた。

お？これは助かったんじゃない？ありがとう穂村さん！正直さっきまで初対面だけど恨んでいたよ。君はとてもいい人なんだね！僕の命の恩人だよ！

なんだかんだで僕も手のひらを返したように穂村さんに感謝していたのでした。

男子VS僕（後書き）

すいません今日から5日間ほど更新できません。
本当にごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1543o/>

嘘つきガール

2010年10月12日15時32分発行